男ごゝろ

永井荷風

青空文庫

大方帳場の柱に掛けてある古時計であらう。間の抜けた力のない音でボンボンと鳴り出すのを聞きつけ、友田は寐てゐる夜具の中から手を伸して枕元の懐中時計を引寄せながら、

「民子さん。あれア九時でせう。まだいゝんですか。」と抱寐した女の横顔に頤を載せた。

「あら。もうそんな時間。」と言つたが、女も男と同じやうに着るものもなく寐てゐたので、夜具の上に膝を揃へて起き直りながら、

「浴衣(ゆかた)どこへやつたらう。これぢや廊下へも憚(はゞか)りへも行けませんよ。」

「かまふもんですか。廊下にや誰もゐやしません。」

「でも、あなた。話声がするわ。お客さまぢや無いか知ら。」

「われ〳〵と同じやうな連中でせう。」

「憚りも二階でしたわね。」

「洗面所の突当りでせう。構ふもんですか。」

「でも、これぢやアあんまりですわ。」

女は夜具の側(わき)にぬぎ捨てた旅館の浴衣を身にまとひながら、障子をあけて廊下へ出た。

男は枕元の銀時計を見直しながら、夜具の上に起直つて手近にぬぎ捨てゝあるメリヤスとワイシヤツを引寄せる。

洗面所の水の音が止つて、男がワイシヤツの片袖に手を入れかけた時、縮髪(ちゞらしがみ)を両手で撫で

ながら女が戻つて来た。

「時間の立つのは全く早いですね。」

「ほんとうねえ。会社を出た時は五時打つたばかりでしたわね。」

「誰もまだ気がつきはしないでせうな。知れるとまづいですからね。」

「注意に注意してるから大丈夫だと思ひますわ。誰しも若い中は仕方がありませんわ。活きてゐるんですもの。ねえ、あなた。」と女は両足を投出し丸めた靴足袋を取上げながら、「公然結婚の約束をしてしまへば誰が何と言はうと構ふことは無いんですからね、わたし、ほんとに早くさうなりたいと思ひますよ。ねえ。あなた。」

男は何も言はず、片足を立てゝ靴足袋をはく女の様子を眺めながら、静にシヤツの襟のネクタイを結び初めた。

二人は西銀座裏の堀端。土端の近くに立つてゐる建物の三階の一室を借りて営業してゐる或商事会社の雇用人で。男の方は名を友田信三。年は三十四五、社長の親戚に当るばかりか、社員の中でも古顔の一人であるが、女の方は半年ほど前に新聞の広告を見て志願書を出して雇つて貰つたばかり。年は二十四五。戦災前長年人形町の表通に雑貨店を出してゐた商家の娘で、災後の現在は新小岩へ移転し女学校を出た後、日本橋通の或商店に雇はれ売子になつてゐた事があつた。人並よりは小柄な身に簡易な洋装をした姿。年よりはずツと若く見えるが上に町育

ちの言葉使ひやら愛嬌やら、どこか男の目を牽く艶かしさが見えるので、初めて見た其時から友田は何とかしてやりたいやうな気になつてゐた。

女は会社がひけると毎日歩いて土橋を渡り新橋の駅から国鉄の電車に乗り、秋葉原で総武線に乗り替へて行く道順をも、友田は人知れず其後をつけ、或日にはその住んでゐる親の店の近くまで行つたこともあつた。其間にも折があつたら手でも握つてやらうと思ひながら空しく一ト月あまりを過した或日曜日の午後である。友田は偶然浅草公園映画町の人中で、これも唯一人歩いてゐる彼女に出会つた。

二人は互にアラと言つたなり驚いて其場に佇立(たゝず)んだ。やがて言訳らしく女が何か言出さうとするのを、友田は聞えぬ振で、映画館の入場券を売る傍の窓口へ歩み寄り、手早く切符を買ひ取り、「民子さん。鳥渡見て行きませう。どんな写真だか分りませんが、これ、あなたの切符。」

「まアどうも、すみません。」とこの場合厭とも言へず、女は切符を受取り男と並んで内へ這入ると、天気の好い日曜日の事で、場内は大入満員の好景気。出入の戸口から場内左右の壁際まで、席のあくのを待つ看客が押合ふやうに立込んでゐるため、正面舞台の映画は人の頭に遮られて能くは見えない。

「どうです。見えますか。もつと此方へお寄んなさい。」と友田は女の手を取らぬばかり寄り添つて人中へ割込むと、絶えず後方(うしろ)から押して来る人波に押出されて、男よりも先に女の方か

ら男の洋服の袖口につかまる始末。二人は互に寄りかゝるやうに身を寄せ合ひ、知らず知らず呼吸の触れ合ふ程顔を近づけてしまつたが、する中映画が変つたと見えて、場内が明くなり、彼方此方の椅子から立つ人が出来たので、二人は思ひがけなく近いところに空いた席を見つけてその後に腰をおろした。物売の小娘が映画の変り目をねらつて、アイスクリームやら菓子煎餅やらを呼びながら売り歩くのを、友田は早くも呼び留めて、蜜柑を買ひ、「どうです一ツ。」と云つて、膝の上に手を組んでゐる女に渡した。

　映画館を出ると短い秋の日はもう夕方近くになり、あたりの電灯は一際明く輝き渡るにつれて、往来の人の賑ひもまた一層激しくなるやうに思はれた。

「どうです。お茶でも飲みませんか。」

「えゝ、有難うございますけど、今日はだまつて出て参りましたから。」

「さうですか。それぢやまた此の次の日曜日に。約束して下さい。いゝでせう。」

「はい。」

「お宅は新小岩でしたね。」

「はい。」

「それぢや国鉄でお帰りですね。」

「はい。」

「浅草橋でお乗りなら、私はお茶の水の方ですから、そこまでお送りしませう。」

あくる日会社で顔を見合したが、友田は黙つて知らぬ顔をしてゐると、女の方もそれと察したらしく何知らぬ風をしてゐる中、いつか会社のひける時間になつた。

友田は大急ぎで一歩先に外へ出て電車に乗り秋葉原の乗替場で後から女の来るのを待ち受け、其姿を見るや否や、いきなり近寄つて、

「民子さん。」と声をかけた。

「あら、友田さん。」と女は驚いて其場に立止つた。

「会社ぢや話ができませんからね、僕こゝでお待ちしてゐたんです。是非きいて頂きたい話があるのです。民子さん。きいて下さい。」

「どんな事でございます。」と民子は眼を見張つたが、あたりの人目を憚る様子で、立つたまゝ静に友田の顔を見返した。

友田は一歩進み寄り、わざとらしく声をひそめて、「僕あなたが初めて会社へお出でになつた時から、一目見て好きになつたのです。驚いちやいけませんよ。僕どうしても思ひ切れないんです。僕の言ふこと聞いて下さい。」

言ひながらいきなり友田はハンドバックを持つてゐる民子の手を握つた。

あたりには電車の来るのを待つ人達が並んで立つてゐる。一人の者もあれば三四人連立つて話をしたり笑つたりしてゐるものもあるので、それ等の人目を避けるためか、女は握られた手

を振放さうともせず、その儘だまつて其の場に立つてゐた。

電車が来て駐(とま)ると共に其戸の明くのを遅しと、あたりの人達は争つて乗込むので、乗車場(プラットフオーム)は俄にがらりとなる。友田は握つた女の手を放さず、後の壁際に作り付けた腰掛の方へと歩み寄りながら、

「初めてお目にかゝつた其時からです。僕はあなたが好きで好きでたまらなくなつてしまつたのです。きのふ浅草でお目にかゝつた時は夢ぢやないかと思ひました。僕どうしても思つてる事をすつかりあなたに打明けてしまはなければ居られなくなつたのです。民子さん、御迷惑でも聞いて下さい。」と先へ腰をおろし引き据るやうに其傍に女を坐らせた。女は何とも言はず手を握られたまゝきちんと腰をかけ揃へた足先に視線を移した。

一(ひ)トしきり静になつたあたりは絶えず下から上つて来る乗客で、見る見る中もとのやうに込み合つて来るばかりか、二人しか居ない腰掛のすいてゐるのを見て、二三人の男が大声で話をしながら腰をかけるが否や其一人が口に喞(くは)へた巻煙草にマツチの火をつけた。友田は握つた女の手を離すと共に、言ひかけた言葉を杜絶(とだや)した時、またしても電車が来て駐ると共にあたりの人達はざわめき立つて其方へと走り寄る。女も立上つて、

「では明日。またお目にかゝります。」

「では。左様なら。気をつけておいでなさい。」

友田は後から静に立上り、構内の時計と電車の動き出すのを眺めながら、自分の乗るべき車

の来る向側の乗車場へと歩いて行つた。

次の日は午後から小雨が降り出したのみならず、友田は毎日同じやうな行動を取るのもどうかと考へ、会社を出ると一人ぶら〳〵銀座を歩き其辺のバーで一杯飲んで空しく貸間に帰つたが、眠られない夜の更けるにつれて、これまでの経過を思返して見ると、手を握つて口説いたからは、乗りかけた船も同様、是が非にも行くところまで行かなければならない。それにはどう云ふ方法を取りどういふ場所を択ぶがよからうと、心ひそかに思案をしてゐる中、日は過ぎて明日は又もや日曜日といふ其の前の日になつた。

友田は会社の廊下で、女の出て来るのを待ち受け、

「あしたは浅草で会ふ日です。僕は浅草橋の駅外で待つてゐます。時間は午後……一時ですか、二時ですか。」

「二時。」と言つたなり、女は事務の書類を手にして昇降機の方へ小走りに行つてしまつた。

その日友田は会社がひけてから、夜になるのを待つて、一人浅草公園に出かけて、明日の午後映画を見てから後の帰り道、いよ〳〵彼の女をつれ込む場所をさがして置かうと、あまり人の歩いてゐない静な横町をあちこちと歩き廻つた。

さうした横町には幾軒も宿屋が目につく。いづれも表の店口に家名と並べて、御一泊御一人さまお食事付幾百円。御休息一時間何百円などゝ書き出してあるが、どうもさう云ふ処へは、

男の身の自分さへ一寸這入りにくい気がするので、誘つても彼女はきつと厭だと云ふであらう。それなら食物屋で座敷のあるやうな静な家はないものかと歩き廻つてゐる中、いつか松竹座前の大通へ出てしまつたので、後戻りして別の方面へ出て見やうと、彼は知らず〳〵田原町近くの電車通に立止つてあたりを見廻してゐた。すると往来の人の中からこそ〳〵と彼の傍に寄つて来た四十がらみの和服を来た男が、

「旦那。いかゞです。面白い処へ御案内しませう。旦那。」と話をしかけた。

「うむ。君。鳥渡きゝたい事があるんだよ。」

「へえ、旦那。何でございます。」

「宿屋でなくツて、その、何だよ。食もの屋か何かで、具合のいゝ家さ。」

「へえ。」

「這入りいゝ家で……二人きりで話のできるやうな、静な家を知らないかね。」

「旦那。わかりました。御婦人とお二人づれ……。」

「さうだよ。今夜ぢやない。明日の午後でいゝんだがね。」

「旦那。承知しました。お連込ならお誂向きと云ふ処が御在ます。」

「さうか。」

「お好焼をする家で御在ます。お婆さんと十二三になる小娘が一人、外には誰も居りません。」

「さうか。」

「三畳敷のお座敷が二間か三間ございますが、二階へお上りになると、床の間つきで、蒲団ぐらい敷かれるお座敷があります。」

「うむ。さうか。此処から遠いかね。」

「直ぐそこで御在ます。よろしければ御案内いたしませう。」

「何といふ家だか、名前も教へてくれないか。」と友田はそれとなくあたりに気を配りながら、百円札一枚を外套のかくしから取出して男に手渡しをした。

「旦那。すみません。表の店口は硝子戸を明けて這入るんで御在ますが、裏へ廻ると路次ですから誰にも知れツこは御在ません。」と小声に説明しながら、其男は先に立つて大通を向側へ越し、並んでゐる商店の間の小道に案内した。

翌日の日曜日、友田は約束した時間に浅草橋駅の改札口まで出かけ、半はどうかと危ぶみながら待つてゐると、さして多くもない乗客の後から、今日は和服にショールを纏つた彼女の下りて来る姿を見て、此の調子なら今日はいよ〳〵大丈夫だと思つた。

都電で雷門まで行き、此の前とは異つた別の映画館に這入つて、矢張其日と同じ頃に外へ出るが否や、友田は「何か一口食べて行きませう。」と女の手をつかまへ、昨日調べて置いたお好焼の二階へ上り、女中代りの小娘が盆に載せた茶を置いて行くのを呼び留め親子丼を誂へた

後、茶ぶ台の傍に坐つてゐる女の身近に寄添ふが否や、「民子さん。」と言ひさま抱き締めて否応はさず接吻してしまつた。

「あら。あなた。」と女は驚いて立上らうとするのを、友田はかまはず力一ぱい抱きすくめて、

「許して下さい。いゝでせう。今日は。今日は。」と言ひながら身悶えする女を其場に押倒した。

かうなつてはどうする事もできないと見え、女は乱れた裾前もそのまゝ、

「あなた、乱暴ね。ひどいわ、ひどいわ。」それも小声で言ふばかり。

暫くして、女は肩から落ちさうになつた羽織の紐を結び直さうとした時、わざとらしく梯子段に足音をさせて、女中代りの小娘が親子丼を二ツ運んで来て、茶ぶ台の上に置き、「お茶只今。」と言ひながら下りて行つた。

「民子さん。僕今日は気が狂(ちが)つてるかも知れません。許して下さい。どうぞ許して下さい。」とまたしても抱き寄せやうとする始末。女も遂に覚悟をしたものか、そのまゝ寄り添つたなり静に割箸を取つて男に渡した。

小娘が茶を入れた小形の湯呑を二ツ持つて来る。

「静だけど下にはお客様があるのかね。」

「いゝえ。内のお客様は晩(おそ)う御在ますから、まだどなたもお見えになりません。」

「さうかね。」

「どうぞ御ゆるりなさつて。御用が御在ましたら、どうぞお手を。」
「ぢやもう暫く御邪魔するよ。」
「はい。どうぞ。」と小娘は何事も心得て居るらしく、わざとお客の顔を見ぬやうにして下りて行つた。
友田が手を鳴して再び小娘を呼び上げ、席料と食べ物の代価を払つたのは、かれこれ一時間近くも過ぎてからであつた。
この日を手始めに、友田は日曜日毎に民子をつれて来るやうになつたが、四五回目で丁度其の月も変る頃からぱつたり姿を見せぬやうになつた。

友田は突然会社の横浜支店に転任を命ぜられ、本郷の貸間を引揚げて其町へ移転した。
浅草で逢ひつゞけてゐる中から、彼は早くも民子には倦きてゐた。同じ処で同じ女に逢ふのが、つまらなくて成らなくなつたものゝ今更さうとも云へないので、二三度処を変へてパン／＼の出入する烏森あたりの旅館へ連込んだ事もあつたが、矢張同じ事。女の言ふこと、為すことはきまり切つてしまつて、初の中催したやうな刺戟も昂奮をも感じさせないので、遂には連込の席料を払ふことさへ次第に惜しくなるばかり。何とか口実をつけて逃げたいと思ふ矢先、突然横浜転任の命令を受けたのは、彼の身に取つては全く天の佑（たすけ）であつた。
月日は忽ち半年あまりを過ぎた。或日友田は東京にゐた時分の昔を思出し、同じやうな日曜

の休日、久しぶりに銀座通や浅草公園を歩いて見やうと、横浜の駅から電車に乗ると、偶然車の中で以前机を並べて仕事をしてゐた同僚の一人に出会つた。

「やア、君。」

「やア、友田君。」

「今日は親類の者に頼まれて税関まで出て来たんですが、休日で駄目でした。」

「さうでしたか。東京の本店では皆さんお変りもありませんか。」

「みんな無事にやつて居ます。変りはありません。」

「女の人達も先の通りですか。」

「さう云へばあの人……君の机の筋向にゐた貝原民子さん。」

「うむ。民子さん。小柄の人でしたね。どうかしましたか。」

「近々結婚するさうです。」

「あの人が結婚をする……」

「会社へ来る前働いてゐた商店の人と、急に話がきまつて結婚するんださうです。」

「さうですか。さうですか。それは目出たい話ですな。」

友田は載せた雑誌の落るのもかまはず片手で其膝を叩き、さも可笑しさうに声まで出して大きく笑つた。

昭和卅一年三月

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆　別巻83　男心」作品社
　　1998（平成10）年1月25日第1刷発行
底本の親本：「荷風全集　第一一巻」岩波書店
　　1964（昭和39）年11月発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2009年12月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

男ごゝろ

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/